１８. SR 症状, 徴候及び異常臨床所見・異常検査所見で他に分類されないもの　（R104　反復性腹痛）

文献

Abbott RA et al. Psychosocial interventions for recurrent abdominal pain in childhood (Review). *Cochrane Database Syst. Rev*. 2017, 1: CD010971

1. 背景

学齢期の小児の 4～25%が反復性腹痛(RAP)を患っているといわれ、QOL を著しく低下している。しかし多くの小児では器質的原因が不明で明確な治療法は定まっておらず、近年増加している心理社会学的介入の評価が必要である。

2. 目的

RAP を有する小児への心理社会学的介入が腹痛の軽減に効果的かを判断する。

3. 検索法

2016 年７月に CENTRAL、MEDLINE、Embase など８つの医学論文データベース、論文引用データベース、臨床試験データベースを用いて電子的検索を行った。

4. 文献選択基準

RAP を有する小児(5～18 才) 、または ROME III によって定義される腹痛に関連した機能性消化管障害し対する心理社会学的療法と従来の治療、アクティブコントロール群、またはウェイトリストコントロール群と比較したランダム化比較試験を行った論文。

5. データ収集・解析

５人の筆者が論文から試験の特徴、被験者の特徴、評価項目を抽出し、Cochrane の解析ソフト Review Manager 5 を用いて解析した。また論文の質は GRADE を用い評価した。

6. 主な結果

928 人の小児が参加した 18 本のランダム化比較試験(26 本の論文)における、認知行動療法(CBT)、催眠療法、ヨガ、筆記による自己開示療法が検討された。ほとんどの試験が短期間で小規模であり、追跡調査が６ヶ月以内に行われたものもあった。短期間では CBT、催眠療法では腹痛の軽減に効果がある程度認められたが信頼性は低い。

ヨガ療法とコントロール群とを比較した研究は３編あったが、介入後、痛みの強さを軽減するという有効性のエビデンスは得られなかった (SMD -0.31、95% CI -0.67～0.05、Z = 1.69、P = 0.09、３つの試験に 122 人の小児が参加。低信頼度)。

7. レビュアーの結論

CBT および催眠療法においては短期間では腹痛の軽減にある程度の効果が認められたが、いずれの心理社会学的療法にも長期効果はなかった。ヨガの有効性を示すエビデンスは得られなかった。サブタイプごとの効果を検討するにはデータが不十分であった。
これらの試験は被験者が少人数のため、エビデンスレベルが低く評価される。また結果の精査に盲検をかけないなど試験の品質が低い、または著しく低かった。さらに 70%以上の異質性など選択バイアスが見られた。RAP のサブタイプに適した療法の選択など、より精度および信頼性の高い試験が必要である。

木村 真紀　岡 孝和　2018 年 3 月 30 日